

福音を宣べ伝える ― どのように？

(マタイ 28:19 - 20) 「それゆえ、行って、すべての国の人々（諸国民）を弟子とし、父と子と聖霊との名において彼らにバプテスマを施し、わたしがあなた方に命令した事柄すべてを守り行なうように教えなさい。そして、見よ、わたしは事物の体制の終結の時までいつの日もあなた方と共にいるのです」。

19 節に示されている 幾つかの要素、「行って」「弟子とし」「バプテスマを施し」が挙げられていますが、命令形で与えられているのは、「弟子にしなさい」だけです。後はそのための手段です。

これまでは、対象をユダヤ人に限定していた業を、イエスは、この最後の言葉で、「異邦諸国民を弟子とするように」と指示しておられます。

20 節で、それを「守る」ように「教えなさい」としています。

不思議なことに、この最後の指示の中に、「福音」（良いたより）とか「宣明」「伝道」「宣べ伝える」などの言葉が一つも使われていません。

端的に「弟子にしなさい」と目的だけ告げられたのを考えると、言外に「方法のいかんを問わず」という考えがあったようにうかがえます。

いずれにしても、このイエスのこの言葉は 11 人の使徒たちに対して与えられた言葉で、当時の他のクリスチャンや後の時代の全てのクリスチャンに与えられたものではありません。

ルカは使徒たちの活動の書の冒頭ではっきりと、そう記録しています。

(使徒 1:2) 「…そのお選びになった使徒たちに聖霊を通して命令を与えたあと [天に] 上げられた…」

それで、マタイ 28:19、20 は単なる勧めや励ましの言葉ではなく、使徒たちに対する、「聖霊による命令」のことばでした。そして、その数節後で、ひとり欠けていた使徒の補充する際の記述はこうなっています。

(使徒 1:24 - 26) …これら二人のうちどちらの者を選んで、この奉仕の務めと使徒職の地位をお取らせになるのか明らかにお示してください。…こうして彼らについてくじを引くと、くじはマッテヤに当たった。そして彼は十一人の使徒と共に数えられた。」

使徒職とは一

(マルコ 3:14 - 15) 「…イエスは十二人の群れを作り、また彼らを「使徒」（ギリ語、アポストロス； 字義：遣わされた者、使節。）と名づけられた。これは、彼らがイエスのもとにとどまり、また、イエスが彼らを遣わして宣べ伝えさせ（ギリ語：ケリユーセイン； 字義：伝道させ）、悪霊たちを追い出す権威を持たせるためであった。」

それで、最後の命令の後、幾日も経たないうちに、ペンテコステの日に、ヨエルの預言の成就

として聖霊が注がれ、奇跡的に外国語を話せるようになり、このことにより、「行って、異邦人を弟子とする」という務めを果たせるようになります。その後、この使徒たちを中心に福音は急速に広がってゆきます。そして、この時、「クリスチャン会衆」と言うべきものが誕生しました。

(エフェソス 4:7,11)「…キリストが無償の賜物をどのように量り出してくださったかに応じて、わたしたち一人一人に過分のご親切が与えられました。そして彼は、ある者を使徒、ある者を預言者、ある者を福音宣明者（ギリ語：エウアングリスタス）、ある者を牧者また教える者として与えました。」

「無償の賜物」と表現されているのは、ペンテコステの際の聖霊のことです。

その聖霊はその場にいた全員に配られたようですが、その働きは全員に同一ではなく、それぞれに異なったものでした。

(コリント第一 12:28-30)「…そして神は会衆内にそれぞれの人を置かれました。第一に使徒、第二に預言者、第三に教える者、次いで強力な業、次いでいやしの賜物、助けになる奉仕、指揮する能力、種々の異言です。」

「使徒、預言者、福音宣明者、牧者、教える者」などの立場が挙げられていますが、まず、ここで改めて「使徒」に注目してみましょう。ピックアップすると「使徒職」の特別性が浮かびあがってきます。

先に引用した、使徒 2：24にある「この奉仕の務めと使徒の職」という表現から分かるように、この時の「弟子とする」任務は、厳密には使徒だけに与えられた、特別な、権限を伴う任務だったことはすでに述べましたが、それを果たして行く際に与えられた聖霊の働きには目を見張るものがあります。

(使徒 2:43)「多くの異兆やしるしが使徒たちを通して起こりはじめた…

(アナニヤとサツピラの虚偽を糾弾した使徒の言葉で、息絶えた出来事の直後の記録)

(使徒 5:12)「…そのうえ、使徒たちの手を通してその後も多くのしるしや異兆が民の間に起こった…

(使徒 8:18)「…使徒たちが手を置くことによって霊が与えられるのを見た時、…

使徒たちには、癒やしの賜物、死人を復活させる力、他の人に奇跡的な賜物を付与する力などが与えられていました。

ではもう一つの会衆の立場である「預言者」にも注目してみましょう。

(使徒 11:27 - 28)「…さて、そのころ、預言者たちがエルサレムからアンティオキアに下って

来た。その一人、アガボという名の者が立って、大飢きが人の住む全地に臨もうとしていることを霊によって示した…」

(使徒 13:1)「…さて、アンティオキアには、その会衆に預言者や教え手たちがいた。バルナバ、それにニゲルと呼ばれるシメオン、キレネのルキオ、地域支配者ヘロデと一緒に教育を受けたマナエン、そしてサウロであった。」

(使徒 15:32)「…そしてユダとシラスは、自ら預言者でもあったので、何度も講話をして兄弟たちを励まし、また強めた…」

(使徒 19:6 - 7)「…パウロが彼らの上に手を置くと、聖霊が彼らに臨み、彼らはいろいろな国語で話したり預言したりするようになった。全部で十二人ほどの男子がいたのである。」

(使徒 21:8 - 9)「…福音宣明者フィリポ・・・には四人の娘がいたが、処女であり、預言をしていた。」

聖霊による奇跡的な賜物は、男子だけでなく、女性や若者にも与えられていました。

このように、使徒、預言者、病気を癒す賜物、福音宣明者、牧者、教える者などは、キリストの無償の賜物として与えられました。その立場も働きもすべて目的は、基本的にキリストが昇天される際に使徒たちに与えられた、「人々を弟子とする」という任務を遂行させるためでした。

さて、今日、これらのうち、まず絶対にいないと思えるのは、使徒と預言者でしょう。

(もったも、勝手に仲間のクリスチャンに権威を行使しようとする者、もったもらしく不思議な預言をする人々も中にはいますが) 言葉としては、福音宣明者(伝道者)、牧者、教える者などは現在も聞かれます。

しかし、今日、どうして「使徒」や「預言者」という立場の人はいないのでしょうか。

あるいは逆に、どうして、「牧者」「年長者」「教える者」「福音宣明者」(宣教者)「伝道者」などは現代にも存在するのでしょうか。

1世紀の、これらの立場、仕事(奉仕の務め)、権威が、後の時代に継承されていくということを明確に述べている箇所はどこにも見当たりません。

例えば、「使徒職と預言者」だけは1世紀で終わり、その他の職は、後代に継続するなどと言うような記述は一切ありません。

そして、現実の歴史も、ペンテコステに集まっていた120ほどの男女と、それ以降、使徒たちを通して与えられた聖霊の賜物は、使徒たちの死後途絶えたことを物語っています。

その働きも、立場も、力も、権威も継承されることは有りませんでした。

むしろ、その全ては止むと記されていますし、現に途絶えました。

(コリント第一 13:8、13)「愛は決して絶えません。それに対し、預言の賜物があっても、それは廃され、異言があっても、それはやみ、知識があっても、それは廃されます。しかし今、信仰、希望、愛、これら三つは残ります。しかし、このうち最大のものは愛です。」

止み、廃されたものは、「預言」「異言」「知識」などです。これらは、クリスチャンの業、つまりすべて宣教に関連したものです。

一方、ずっと残る（継続される）ものは「信仰」「希望」「愛」などです。これらは、クリスチャン人格に関わるものです。

これらの聖句と歴史を踏まえた上で、改めて、次のような質問を考慮してみてください。

「では、このうち限られた一部のもの、奉仕の務めや伝道、牧者（牧師）、さらには教会（クリスチャン会衆）、その集まりに定期的に集うなどという取り決めの現代に至るまでの継続はどれほど聖書的な根拠のあるものなのでしょうか。」

まず、クリスチャン会衆について考えますと、聖書が明らかにしているのは、使徒たちの死後、「…弟子たちを引き離して自分につかせようとして曲がった事柄を言う者たちが起こる…」ということでした。

「邪説を唱えて弟子たちを従わせようとする者が現れる。」（使徒 20:30 新共同訳）

あるいは、小麦を植えたはずの所に、雑草（毒麦）が捲き足され、判別が付かなくなるということであり、そうした状況はいつまで続くかと言うと、ハルマゲドンの直前まで、そうした状態であることを聖書は述べています。

（啓示 18:4）…「わたしの民よ、彼女の罪にあずかることを望まず、彼女の災厄を共に受けることを望まないなら、彼女から出なさい。」

「私の民」つまり本物のクリスチャンは、この時初めて、そこから出るようになっていきます。

それ以前に、小麦と雑草、つまり真のクリスチャンと偽クリスチャンの分離がなされることは聖書中のどこにも記されていません。その後は、もう即、キリストの到来と「選ばれた者たちを集める」業がなされ、直後に裁きがなされる事になっています。すなわち、天に集められるということです。もはや、「会衆」を構成したり、何かの業をその単位で行うなどという期間はありません。

従って、本物のクリスチャンだけからなる、あるいは、ほとんどが本物のクリスチャンで構成される「真のクリスチャン会衆」などというものは、西暦 1 世紀以降は地上に決して存在しないと断言するのが、聖書の述べる所です。

ということですから、後は推して知るべしで、どんな教団のどんな類のものであれ、その教会（会衆）の牧者、教え手、その集まりに集うこと、宣べ伝える業、取り決めなどすべて、何一つ、正式なキリスト公認のものはありません。

好意的に表現すれば、1 世紀当時の型に倣って、自主的にそのようにしている。ということであり、あるいは、別の言い方をすれば、勝手にその正当性を主張しているに過ぎないということです。

では、福音を宣べ伝えることに関する多くの聖句をクリスチャンはどのように受け止めるべきでしょうか。

それに関する一つの聖句を引用しておきましょう。

(テモテ第二 4:1 - 5)「キリスト・イエスのみ前」あって、またその顕現と王国とによって、あなたに厳粛に言い渡します。み言葉を宣べ伝え（ギリ語：ケリュツソーン トン ロゴン； 字義：その言葉を伝道し）、順調な時期にも難しい時期にもひたすらそれに携わり、辛抱強さと教えの術とを尽くして戒め、けん責し、説き勧めなさい。あなたはすべての事に冷静さを保ち、苦しみを忍び、福音宣明者（ギリ語：エウアングリステー）の業をなし、自分の奉仕の務めを十分に果たしなさい。」

厳密に言ってこの言葉はパウロがテモテ個人に対して「厳粛に言い渡した」ものであり、文脈を読んでもこの指示が、テモテ以外の人に適用されると言えるものは何もありません。言うまでもありませんが、聖書中の書簡の多くは初期クリスチャンの個人的な手紙であり、それが、聖書の一部として編纂（へんさん）されたとは言え、そこに「あなた」と書いてあったら、今読んでいる自分の事を指している、ワケではないことは確かです。

ここで、「ケリュツソーン ；伝道する」と「エウアングリステース；福音宣明者」という似たような意味を持つ二つの語句に注目できます。

まず最初に「ケリュツソーン」を考察します。

ここでクイズを一つ：

ギリシャ語聖書中で、人々に伝道した（ギリ語、ケリュツソーン が使われている箇所）に誰がいるでしょうか。全部で何人くらいいると思いますか。 具体的な名前を挙げて下さい。

（思いっくだけ何人でも）

この語が出現する 61 箇所全部を調べましたが中でも興味深いのはルカ 8:1 です。

「イエスは、都市から都市、村から村へと旅をされ、神の王国の良いたよりを宣べ伝えまた宣明された」

ここでは、神の王国の「エウアングゾメーノス」（良いたよりを宣べ伝え）、そして「ケリュツソーン」）宣明された、つまり伝道したと記録され、この二つの語句の意味あい重複するものではなく、異なる意味を持つものであることを示しています。

では、クイズの答えです：

正解は 18 人 イエス・キリスト、十二使徒、パウロ、テモテ、フィリポ バステストのヨハネ、み使いです。

バステストのヨハネ、そしてみ使いとキリストご自身を除けば、クリスチャンで「伝道」しているのはわずか 15 人だけです。これ以外の人には「伝道」はしていません。

つまり、この語の使われ方を見ますと、ごく少数の、特別な資格保有者に限って使われている

という印象を受けます。

それではもう一つの「福音宣明者」と訳されている「エウアンゲリステース」の方も考察しましょう。

この語の成り立ちを見ますとまず、「良い（エウ）知らせ（アンゲリオン）」から「エウアンゲリオン ; 福音」という語があり、「エウアンゲリステース」はこの一語で「福音を宣べ伝える者」という意味があります。

（ちなみに「み使い」というギリシャ語は アングロスといい、エンゼルの語源となっています）

「エウアンゲリステース」は聖書中に全部で 3 回使用されています。（使徒 21:8、エフェソ 4:11、テモテⅡ 4:5）

新改訳聖書と口語訳聖書では「伝道者」、新共同訳聖書では「福音宣教者」、新世界訳では「福音宣明者」と訳されています。

これらの聖句三つもすでに上に引用しましたが、名前が挙げられているのは「フィリポ」と「テモテ」だけです。これもまた、極めて少数の、限られた有資格者の役職のように見受けられます。

では、「伝道」もしていない、「伝道者」でもない、その他の大勢の人の宣べ伝える業はどういう言葉で、どういう性質のものなのでしょうか。

ヒントはすぐ上のクイズのところで示したルカ 8：1 にあります。

そこには「良い便りを宣べ伝え」と訳される「エウアンゲゾメノス」という語がありました。

この語のシンプルな形は「エウアンゲリゾー」で、「エウアンゲリステース ; 伝道者」（名詞）の動詞形です。

ですからこれも、その一語で「良い便りを宣べ伝える」という意味があります。

この言葉は新約聖書に 54 回出てくる言葉です。

エウアンゲリゾーとは —

ここでも、その使用例を 2 つ挙げておきましょう。

（使徒 5:42）「そして彼らは毎日神殿で、また家から家へとたゆみなく教え、キリスト、イエスについての良いたよりを宣明し（エウアンゲリゾー）続けた。」

（使徒 8:4 - 5）「散らされた人々は、み言葉の良いたよりを宣明しながら全土を回った。そのひとりフィリポは、サマリア市に下り、人々にキリストを宣べ伝え（エウアンゲリゾー）はじめた。」

ここからは聖書中の「エウアンゲリゾー」の使われ方とその意味するところ、そして「ケリュッソーン」との違いを説明します。

英語や日本語では能動態と受動態という動作の方向性を表す二つの変化があります。

能動態は動作の主体が行った動作が自分から他者におよぶことを意味する。(する)

これに対して受動態というのは相手の動作が自分におよぶことを意味する。(される)

ところが、ギリシャ語では、もうひとつ、そのどちらでもない「中動態」と呼ばれる「態」があります。

この中動態に注目します。なぜなら、「エウアンゲリゾー」は54回中、そのほとんどは中動態で使われているからです。*

「中動態」は、自分がなした動作が自分に返ってくるという方向性を持つ。と説明されます。

また、「中動態」にはさらに、「再起中動」「間接中動」「相互的中動」など呼ばれる種類があります。

簡単にその違いを説明しますと、

「再起中動」=主語の行った動作が主語自身におよぶ場合

「間接中動」=自分自身のしている動作が、直接ではなく何らかの形で間接的に自分自身に影響する場合

「相互的中動」=「相互に～し合う」という意味を表す場合

それぞれの違いは文脈から判断するそうですが、「中動態」の共通した特徴は、要するに、能動態や受動態のような一方通行的な動作とは違い、自分の行動が相手を経由して自分に戻ってくるとか、その動作が自分と相手の双方に、あるいは相互に作用しあうという双方向的な動詞の様態を表すものだということです。

具体的な例で示した方が分かり易いでしょう。

例えば「私は洗う」というと、能動態なら、私が何かを洗うということになりますが、この「洗う」が中動態だったら「私は自分自身を洗う」という限定的な意味になるということです。

あるいは、「私は殺す」というと（例がちょっと何ですが、端的に分かり易いと思うので敢えて使いますが）これだけだと、誰かもしくは何かを殺すということだけはわかりますが、それ以上のことはわかりません、しかし、これが中動態だと、明確に「自殺」を意味するようになるということです。（「再起中動」の例）

もうひとつ別の例：テモテ第二 2:24 に「主の奴隷は争う必要はありません」という聖句がありますが、この「争う」は中動態で示されています。争いは一方的に相手にだけ攻撃を与えるケースはまれで、たいてい、自分にも影響が及びます。それで、意味は「互いに争い合う」ということになります。（「相互的中動」の例）

それで、聖書に「エウアンゲリゾー」という動詞が中動態で示されているということは、単に

※ 巻末の資料：[エウアンゲリゾー] 全リストをごらん下さい

自分から相手に一方的に「宣べ伝える」ということではなく、その自分が告げた福音が、直ちにであれ、間接的にであれ、自分にも返ってくる、その行為が相互に作用しあうということの意味するように記されているということです。

一方「ケリュッソーン」は、伝道する、伝達する、告げると言う意味であり、必ずしも福音に限らず、端的に「伝える」という目的に主眼が置かれて使われています。そして、ほとんど能動態で示され、中動態が使われている所はありません。

興味深い事に、福音書の終末預言にある、「終わりのしるし」の一部として良い便りが全世界に伝えられると言う記述では、「エウアンゲリゾー」ではなく「ケリュッソーン」が使われています。

(マタイ 24:14)「王国のこの良いたよりは、あらゆる国民に対する証しのために、人の住む全地で宣べ伝えられるでしょう「ケリュッソーン」

(マルコ 13:10)「また、あらゆる国民の中で、良いたよりがまず宣べ伝えられねばなりません「ケリュッソーン」]

この宣べ伝える業は、終末期に全ての民から「憎しみの的」とされるとき、政府当局などから出頭が命じられて、そこで証しがなされるという形で成就することになっている預言です。ですから、それは彼らと福音を「分かち合う」ようなものではなく、証しとして、伝達されるということでしょう。*

しかし、多くの聖書翻訳は「ケリュッソーン」も「エウアンゲリゾー」も文面からは全く区別が付かない訳し方になっています。

特に「エウアンゲリゾー」をすべて能動態と同様に訳してしまっているのは、適切さを欠いたもので、聖書の著者の本来の意図を伝え損なっていると訳であると指摘されています。

「エウアンゲリゾー」が実際に意味しているのは、「福音を分かち合う」ということです。

しかし、これこそが、全てのクリスチャンが、どの時代においても保つべき姿勢であり、福音に関わる精神態度であり、そのあるべき形態であるといえるでしょう。

すなわち、機会あるごとに、隣人と福音の音信を分かち合い、信仰や希望を分かちあい、励ましあうことを忘れないことによって、クリスチャンは、福音に関する神のご意志を全うすることができるといえるでしょう。

(コリント第一 9:23) …わたしは良いたよりのためにすべての事をするのです。それを他の人々と分かち合う者となるためです。

(ヘブライ 13:15-16)「そのみ名を公に告白する唇の実です。さらに、善を行なうこと、そして、他の人と分かち合うことを忘れてはなりません。神はそのような犠牲を大いに喜ばれるのです。」

※ これに付いての詳細な点は別の資料「20 「良いたよりがまず宣べ伝えられねばならない」とはどのような意味ですか」をご覧ください。

では、マタイ28：19, 20についての結論とも言うべきものですが、全体的にこのレポートは、伝統的な考えや習慣、また先入観を排除して、その言葉は厳密に誰にどんな言葉で語られたか、に注目し、聖書の文面からはこれを意味し、それ以上の意味を持たないという視点で考察しました。

それで、今日、出かけて行って、伝道活動したり、バプテスマを施すようにという正式な命令の下にいる人は誰もいないということが分かります。

20節の「世の終わりの時まで、いつもあなた方と共にいる」という約束も、11人の使徒に語られたもので、それ以上の人に当てはまると言える、明確な記述はありません。

であれば、それは1世紀のユダヤの体制の終わり、もしくは、個々の使徒たちが亡くなるまで、ということになります。

それ以外の人々（当時から現代に至るまでのクリスチャン）に対する、「福音を伝える」という神の意図、キリストの望みや指示などがあるとするれば、この聖句以外の所に見いだされるべきです。

もちろん、「出かけて言って、街や都市を回りながら、福音を伝える努力は褒めるべき事であり、そうすべきでないなどと言う根拠はどこにもありません。

もつとも、預言されているとおり、1世紀以降、宣べ伝えられる、聖書の福音であるとされる音信は、相当に歪められたものであることが少なくないという点を考えると、幾らかの疑問は残りますが、いずれにしても、それ以外の方法で、人々が聖書を知りうるようにはならないというのも事実です。

(テモテ第一 4:1 - 3)「靈感のことばは、後の時代にある人たちが信仰から離れ去り、人を惑わす靈感のことばや悪霊の教えに注意を寄せるようになることを明確に述べています。それは、偽りを語り、その良心に焼き金によるような印を付けられた者たちの偽善によるのです。そうした人たちは結婚することを禁じたり、信仰を持ち真理を正確に知る人が感謝してあずかるために神が創造された食物を断つように命令したりします。」

結局の所、宣教に限らず何であれ、個々のクリスチャンが隣人に、そして神に対して、何をするにもしないにしても、自主的、自発的なものであることに変わりはありません。

唯、聖書の記録そのものから読みとれる、「宣べ伝える」というクリスチャンの責任という意味において、当てはまるのは、各自が「エウアングリゾー」を保つと言うことに集約されるでしょう。

簡単に言えば、近所、職場、学校その他で、そして、近年ではインターネットなどを通して、様々な機会に、福音を知らせ、分かち合うことを喜びとするということです。

最後に、こうした結論を支持する、別の幾つかの記述を挙げておきましょう。

一つは、長老、奉仕の僕の資格に関する記述ですが、テモテ I 3章の中に、監督の職、奉仕のしもべの任命について述べられています。監督についても奉仕のしもべについても、その資格については、模範的な特質や振る舞いが多数挙げられています。伝道や宣べ伝える業などに関しては何も触れていません。

「宣教」がクリスチャンの最重要の務めのひとつなら、その模範となるべき立場の資格の中に、言及されないことはあり得ないでしょう。

仮に、それは敢えて取り上げるまでもない当然のことの故に省かれていると反証する人がいるかもしれませんが、だとしたら、「酔って騒いだり、人を殴ったりせず」などはそれ以上言うまでもない当然のことでしょう。ここでは、「資格」をはっきりさせる確認のためのものですから、当然中の当然のことでも、必要な要素はあえて、全て取り上げている文章です。

奉仕のしもべに関して、「ふさわしいなら、奉仕者として仕えさせなさい」とありますが、彼らの「奉仕者」としての仕事は、食物などの分配や「やもめ」を名簿に載せるなどの仲間のクリスチャンの日常的な世話などであり、その「奉仕」の中に「伝道」が含まれていることを暗示する記録はありません。*

さて、もう一つは聖書巻末の書、黙示録ですが、その記述は基本的にヨハネが霊に導かれて、主の日にいるという観点で書かれているものです。

つまり、その記述は終末期もしくはその直前くらいの時代ですから、ずっと現代に近い、今日の私たちの時代に当てはまると考えて良いでしょう。

とりわけ冒頭に記されている、七つの会衆に書き送った手紙の内容は、クリスチャンの生活、務め、責任について、どんな努力が見られ、何を改めるべきかが、それぞれの会衆に対して述べられていますので、各クリスチャンが、宣教に関して何らかの務めを負っているのであれば、どこかに僅かながらでも、そうした言及があるはずです。

しかし、ほとんどは、クリスチャン人格や、信仰を保つ事に関するものだけで、その中に、伝道、宣べ伝える事に付いての言及は一切ありません。

まして、それが少しでもおろそかになるなら、弟子として認められないと言うほどの重要性のあるものなら、それに付いての叱咤激励が微塵もないというのはあり得ないでしょう。

やはり、この点からも、導き出される結論は、クリスチャンは、計画的な伝道活動の指示命令の下にあるという考えは聖書に基づかない、単なる勘違いか、勝手な思い込みであると言えるでしょう。

* この「奉仕」や、「家から家へ伝道した」という記録に関する詳細は、別の資料「61 初期クリスチャンは本当に「個別伝道」をしたのでしょうか」をご覧ください。

巻末資料 ギリシャ語単語 [エウアングリゾー] 全リスト

リストの見方		見方の例	
先頭の文字は品詞です。 Vは動詞		使徒8:4	V -P M P -NPM
一の後の文字は左から順に [時制][態][法]			動 現 中 分 詞 在 動 詞 形 態
この中央がMのものは中動態です			
時制の例	態の例	法の例	
P: present (現在)	A: active (能動相)	I: indicative (直接法)	
I: imperfect (未完了過去)	M: middle (中動相)	S: subjunctive (接続法)	
F: future (未来)	P: passive (受動相)	N: infinitive (不定詞)	
A: aorist (アオリスト)		P: participle (分詞)	
Matthew 11:5	V-PPI-3P	Galatians 1:8	V-PMS-3S
Luke 1:19	V-AMN	Galatians 1:9	V-PMI-3S
Luke 2:10	V-PMI-1S	Galatians 1:11	V-APP-ASN
Luke 3:18	V-IMI-3S	Galatians 1:16	V-PMS-1S
Luke 4:18	V-AMN	Galatians 1:23	V-PMI-3S
Luke 4:43	V-AMN	Galatians 4:13	V-AMI-1S
Luke 7:22	V-PPI-3P	1 Corinthians 1:17	V-PMN
Luke 8:1	V-PMP-NSM	1 Corinthians 9:18	V-PMP-NSM
Luke 9:6	V-PMP-NPM	1 Corinthians 9:16	V-PMS-1S
Luke 16:16	V-PPI-3S	1 Corinthians 15:1	V-AMI-1S
Luke 20:1	V-PMP-GSM	1 Corinthians 15:2	V-AMI-1S
Acts 5:42	V-PMP-NPM	2 Corinthians 10:16	V-AMN
Acts 8:4	V-PMP-NPM	2 Corinthians 11:7	V-AMI-1S
Acts 8:12	V-PMP-DSM	Ephesians 2:17	V-AMI-3S
Acts 8:25	V-IMI-3P	Ephesians 3:8	V-AMN
Acts 8:35	V-AMI-3S	1 Thessalonians 3:6	V-AMP-GSM
Acts 8:40	V-IMI-3S	Hebrews 4:2	V-RPP-NPM
Acts 10:36	V-PMP-NSM	Hebrews 4:6	V-APP-NPM
Acts 11:20	V-PMP-NPM	1 Peter 1:12	V-AMP-GPM
Acts 13:32	V-PMI-1P	1 Peter 1:25	V-APP-NSN
Acts 14:7	V-PMP-NPM	1 Peter 4:6	V-API-3S
Acts 14:15	V-PMP-NPM	Revelation 14:6	
Acts 14:21	V-AMP-NPM	Revelation 10:7	
Acts 15:35	V-PMP-NPM		
Acts 16:10	V-AMN		
Acts 17:18	V-IMI-3S		
Romans 1:15	V-AMN		
Romans 10:15	V-PMP-GPM		
Romans 15:20	V-PMN		